



Title	『朱子語類』訳注(七)巻一一五・1条～10条
Author(s)	垣内, 景子
Citation	明治大学教養論集, 411: (1)-(14)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5264">http://hdl.handle.net/10291/5264</a>
Rights	
Issue Date	2006-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 『朱子語類』 訳注 (七)

— 卷二一五・1条〜10条 —

垣内景子

### 万人傑への訓戒

【二一五・1】

「曾点と漆雕開はすでに（孔子の道の）あらましを理解していた」（という程子の言葉）について質問した。

朱子「曾点と漆雕開はもともと大きなところを理解していたのだ。但しあらましを理解していただけで、精密ではなかった。」

そこで私人傑に言われた。

朱子「君の欠点は、おおよそ議論のしかたがごちゃ混ぜで、まったく殻を噛み破って核心に迫っていないことだ。だからあれこれ沢山のことに関わっていてすっきりせず、くたくたくずくりくどくて、あの（聖人のような）精密で深いところが無い。もし本当に理解しているのならば、自然に一言二言で明確にできるはずだ。実践の努力は、思い切

りよく徹底してやらなければいけない。所謂『棒一打ちごとに傷が残り、拳骨一発ごとに血まみれ』という具合だ。そういうふうには正面から向き合ってこそ、疑念も無くすことができる。例えば項羽が趙を救った時、河を渡った後で船を沈めて釜を叩き壊し、三日分の食料だけを持って士卒たちに決死の覚悟を示し、帰ろうという気持ちは全く無かったという。だからこそ、秦を打ち破ることができたのだ。もしあれこれくずくず算段していたら、どうにもならなかっただろう。」

そこで、禪語を挙げて言われた。

朱子「一寸の鉄釘ですら人を殺すことができる。殺人の手段にするつもりがないならば、車に満載した鎗や刀も、あれこれ次々に弄ぶだけでは結局何の役にも立ちはしない。」

【一一五・二】

先生はしばしば私人傑に(『中庸』の)「慎みてこれを思う」の一句を解説して下さった。思うことを慎まなければ間違った努力になってしまうことがあるということだ。

【一一五・三】

先生は、帰郷して後の修養についてお尋ねになった。

人傑「謹んでお教えを守り、決して墮落いたしません。以前は先生のお考えについて、まったく疑問が無いというわけにはまいりませんでした。しかし、こちら五夫へ来て後、ようやく先生の道が断然とこれ以外あり得ないものであることが分かりました。近頃『中庸』を読みました。道理は足元の卑近なところから手をつけるもので、そうであれば

あるほど実なるものになるということが分かりました。」

朱子「道理とはそういうものに過ぎないのだよ。それを今の人たちは奥深く玄妙なものとして説こうとし、理解できないところこそが道だなどと考える始末だ。それを次から次へと継承し、理解不能のものによってお互いだまし合っている。まるで偽札を扱っているようなものだ。二程子の経書解釈なども、本当に常識的な解釈で、多くは旧説と似通っているが、ただその味わいが同じではないのだ。伊川（程頤）は『私は十七八歳の時にはすでに文義は理解していたが、読めば読むほどその味わいが深まるのを覚えた』と言っている。つまり、この道理というものは、説けば説くほど明かになり、読めば読むほど精密になるもので、玄妙で言葉にできない何かがあるのではないのだ。近頃の湖南の学者たちはもう昔の欽夫（張栻）とは違ってしまっているようだ。あちらへ行くことがあれば一度片を付けてやろうと思っていたが、それもかなわないのが何とも残念だ。」

#### 【一一五・4】

私人傑の『論語疑義』をご覧になって言われた。

朱子「正淳の欠点は、人と正反対のことを言いたがることだ。扇子に譬えるならば、多くの人がこちらの面を言えば、君はあちらの面を言い立てて反論し、人があちらの面を言えば君はこちらの面で難詰する。以前欽夫（張栻）の『論語』解釈を見たが、同じようなところが多かった。私はかつて彼に、そんなふうだと（『論語』の注釈ではなく）別の書物を作って『論語』と難詰し合っているようなものだと言ったものだ。」

【一一五・五】

先生は私人傑に「学ぶ者の多くが禪にはまってしまふのは何故か」と質問された。私は、彼らは吾ら儒家の「格物窮理」の努力を嫌い、より手っ取り早い近道に趨ろうとするからではないかとお答えした。

朱子「『操れば存し、舍つれば亡ぶ（心は、コントロールしていればあるべきところ）にあり、自棄すれば亡んでしまふ』、吾ら儒家にはこのような実践方法がある。とは言え、そもそも『操』らずに『存』することなどあり得ない。それなのに仏教では『操』らずに『存』することができる道理があるなどとするものだから、学ぶ者たちがこぞって仏教に靡いてしまうのだ。そもそも『主一』の努力についても、学ぶ者たちが口で言うだけで実践することができないから、仏教の説に対抗することができないのだ。」

人傑「私の考えでは、口先だけでない者こそ真に所謂『操れば存す』ることができるのだと思います。」

朱子「それでもまだ結局は欠点がある。」

人傑「実践努力の欠点ならばあるでしょう。しかし、心は常に『存』しているはずです。」

朱子「君はそうやってひたすら議論を挑んでくるが、それが大もとの欠点だ。」

私は先生のご教誨を何度もくり返し反芻した。

人傑「ご教誨いただきましたが、私には当てはまらないように存じます。」

朱子「君は自説を主張し、道理はそういうものだと思ひ込んでいるようだが、私から見れば、本当に理解している者は自然にもっと明晰なものだ。正淳よ、しばらく静坐をしてもっと考えてみなさい。何故欠点があるのかが分かれば、先に進むことができるだろう。」

そこで言われた。

朱子「程門の諸氏でも游酢や楊時などは、道の理解があまり明確でないから、実践の努力についての議論もまったく切実さを欠いている。『操存』の実践に際して常に自らの身に引きつけて理解すれば、ますます明晰になるはずだ。」

翌日、先生にお目にかかり申し上げた。

人傑「昨日ご教誨を賜り、やっと本当に欠点があることがわかりました。」

朱子「聖人の心は深く澄んだ静かな水のようなもので、たまたま何かに遭遇すればその影が映るに過ぎない。だから心が動けば必ず節度に中るのだ。もし心の中が真っ暗な状態ならば、物事に対応してどうして節度に中ることができようか。」

【一一五・六】

朱子「静の時に道理を理解し、動の時にも道理を理解しなければいけない。もし静の時には理解できるが、動の時には理解できないというならば、まるで何もしていないのも同然だ。」

【一一五・七】

人傑「理を求めてもまだ精微なるところまで到りません。どうしたらよいのでしょうか。」

朱子「日頃あれこれ雑駁なことに心を奪われ、虚心明瞭であることができないからだ。そういうぼんやりとした心をもって天下の理を觀、天下の疑を断じようとして、どうして精微を究められよう。」

【一一五・八】

私人傑は先生のもとを去ろうとして、お教えを乞うた。

朱子「平生の実践の努力は、とことんまで極め、八方塞りになり、入るべき路が見えなくなるまで突きつめてこそ進歩したと言えるのだ。大いに悩めば大いに進むことができる。もし自分でいささか進歩したと感じ、すぐに自分はもう到達したなどと言うようでは、まだ大いに進歩したことにはならない。顔子は『これを仰げばいよいよ高く、これを鑽(き)ればいよいよ堅く、これを瞻(み)るに前に在れば、忽焉として後に在り』という段階から『これに従はんと欲すと雖ども由なきのみ』という段階に至って、もうこれ以上進めなくなってしまったのだ。この段階に至ってこそ、進歩ということをお口にすることができぬ。」

【一一五・九】

人傑「喜んだり好ましく思ったり意に合うことがある度に、自分勝手な心を感じてしまいます。道理を理解しようとするならば、そうした心をすっぱりと克服し、何ものをも喜んだり好んだりしないようにして、意に合うとはいっても当然のことと見なすようにしなければならぬのではないのでしょうか。」

朱子「そういったことは道理が明かになれば自然に解消する。そんなふうには切迫していると、かえって弊害を生じるものだ。」

【一一五・一〇】

朱子「学問には(仏教にいうような)『一超直入』の道理などない。ただただ『銖を積み寸を累ねる』ようにやって

いくだけのことだ。私はそういうふうには苦しみながら少しずつやってきたのだ。もし理解を得ようとするならば、やはり苦しんでやらなければならない。じっと坐って口で言うだけで、僥倖のように得られるものではないのだ。」

正淳（人傑）「連日先生のもとで、自ら努力することをお教えいただき、一貫した要点を得るに至りました。もう十分尽くしたように思われます。」

朱子「後は実践するだけだ。」（記録者・黄齋）

\*

\*

\*

## 原文及び注

### 【資料及び略称】

※底本は『朱子語類』（理学叢書・中華書局）を用いたが、標点や括弧の付し方は適宜改めた。注の中で書名を挙げていない巻数条数はこれのもの。

※以下の諸本を参考に校注を加えた。

○製版：『朱子語類』（辛卯入梓、嶺南藏板）

○正中書局本：『朱子語類』正中書局

○楠本本：『朝鮮古寫・徽州本朱子語類』

○和刻本：『朱子語類大全』和刻本

『遺書』：『河南程氏遺書』（理学叢書『二程集』、中華書局）

『外書』：『河南程氏外書』（理学叢書『二程集』、中華書局）

『程氏文集』：『河南程氏文集』（理学叢書『二程集』、中華書局）



『資料索引』：『宋人傳記資料索引』（中華書局）

『門人』：『朱子門人』（陳榮捷、台灣學生書局）

田中：『朱門弟子師事年攷』（田中謙二『田中謙二著作集』第三卷、汲古書院）

『宋史』：『宋史』（中華書局、標点本）

『学案』：『宋元学案』（中華書局）

【二一五・一】

問「曾點漆雕開已見大意（1）。」曰（校1）「曾點漆雕開是合下見得（校2）大了。然但見大意、未精密也。」因語人傑曰「正淳之病、大概說得渾淪、都不曾嚼破殼子（2）、所以多有纏縛、不索性、絲來線去、更不直截、無那精密潔白底意思。若是實識得、便自一言兩語斷得分明（3）。如今工夫、須是一刀兩段、所謂一棒一條痕、一摺一掌血（4）。如此做頭底（5）、方可無疑慮。如項羽救趙、既渡、沈船破釜（校3）、持三日糧、示士卒必死、無還心、故能破秦（6）。若更瞻前顧後、便不可也。」因舉禪語云「寸鐵可殺人。無殺人手段、則載一車鎗刀、逐件弄過、畢竟無益（7）。」〔以下訓人傑。〕

〔校注〕

※楠本本では本条から10条までは卷一百十三に収められている。

（校1）楠本本は「先生云」に作る。

（校2）楠本本は「合下求見得」に作る。

（校3）楠本本は「破釜甌」作る。注（6）に引く『史記』参照。

〔注〕

（1）曾點漆雕開已見大意 『遺書』卷六・104条「曾點漆雕已見大意、故聖人與之」。曾點については『論語』先進「子路曾皙冉有公西華侍坐。…曰、莫春者、春服既成。冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。夫子喟然歎曰、吾與點也」。漆雕開については『論語』公冶長「子使漆雕開仕。對曰、吾斯之未能信。子說」参照。『語類』卷二十八・30条以下、及び卷四十・27、29条にも同じ程子の言葉をめぐる議論が見える。

（2）嚼破殼子 同様の表現が次の二条にも見える。卷八・138条「咬得破時、正好咀嚼」、同・139条「若只是握得一箇鶻窩底果子、不知裏面是酸、是鹹、是苦、是澁。須是與他嚼破、便有滋味」。

(3) 多有纏縛、一言兩語斷得分明。よく似た発言が次に見える。卷一一七・22条「議論中譬如常有一條線子纏縛、所以不索性、無那精密潔白底意思。若是實見得、便自一言半句、斷得分明」。「絲來線去」は糸がまとわりつくように何かに縛られてくずくずしている様。卷三十四・221条(卷九十七・81条も同じ)「聖人發憤忘食、樂便忘憂、直是一刀兩段、千了百當。聖人固不在說。但顏子得聖人說一句、直是傾腸倒肚、便都了、更無許多廉纖纏縛、絲來線去」。

(4) 一棒一條痕、一摑一掌血。禪語。前半は「碧巖錄」七十八本則著語に見える。棒の一打ちことに傷跡を残すように、拳骨一発ごとに血で染まるように、徹底的に叩き上げること。朱熹は、工夫の徹底性や聖人の潔さを表現するためにこの語を好んで用いている。卷十・24条「須是一棒一條痕、一摑一掌血。看人文字、要當如此、豈可忽略」、卷三十四・140条「聖人全體極至、沒那不問不界底事。發憤便忘食、樂便忘憂、直恁地極至。大概聖人做事、如一棒一條痕、一摑一掌血、直是恁地」。

(5) 做頭底。顔を突き合わせていること。常に正面から向き合っていること。「與、做頭(底)」の形での用例が多い。卷三・80条「人只了得每日與鬼做頭底、是何如此無心得則鬼神服」。

(6) 如項羽救趙、故能破秦。「史記」項羽本紀「項羽乃悉引兵渡河、皆沈船、破釜、燒廬舍、持三日糧、以示士卒必死、無一還心」。卷八・63条にも本条とほぼ同じ発言が見える。

(7) 寸鐵可殺人、畢竟無益。「鶴林玉露」殺人手段「宗杲論禪云、譬如載一車兵器、弄了一件、又取出一件來弄、便不是殺人手段。我則只有寸鐵便可殺人。朱文公亦喜其說」。卷八・62条「宗杲云、如載一車兵器、逐件取出來弄、弄了一件又弄一件、便不是殺人手段。我只有寸鐵、便可殺人」。

## 【一一五・2】

屢與人傑說慎(校1) 思之(1) 一句、言思之不慎、便有枉用工夫處。

[校注]

※楠本本(卷百十三)では本条以下を「訓人傑」とする。

(校1) 楠本本・正中書局本・和刻本は「謹」に作る。以下も同じ。

[注]

※卷六十四・33条(記録者万人傑)は本条とほぼ同じ。

(1) 慎思之。「中庸」(章句二十章)「博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之」。

【一五・三】

先生問別後工夫。曰（校1）「謹守教誨、不敢失墜。舊來於先生之說、猶不能無疑。自昨到五夫（校2）後、乃知先生之道斷然不可易。近看中庸、見得道理只從下面做起、愈見愈實（校3）。」先生曰「道理只是如此、但今人須要說一般深妙、直以爲不可曉處方是道。展轉（1）相承、只將一箇理會不得底物事、互相欺謾、如主管假會子（2）相似。如二程說經義、直是平常、多與舊說相似、但意味不同。伊川曰、予年十七八時、已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長（3）。蓋只是這箇物事、愈說愈明、愈看愈精、非別有箇要妙不容言者也。近見湖南學者非復欽夫之舊。當來（4）若到彼中、須與整理一番、恨不能遂此意耳。」

〔校注〕

〔校1〕 楠本本は「對曰」に作る。

〔校2〕 底本及び和刻本は「五更」に作るが、製版・正中書局本・楠本本により改めた。「五夫」は朱熹の住処。

〔校3〕 製版・正中書局本は「愈下愈實」に作る。

〔注〕

〔1〕 展轉　ぐずぐず、あれこれ、次から次へと、くり返し。「如思慮處事、思慮了、又便做未得。如思量作文、思量了、又寫未得、遂只管展轉思量起來」（卷九十七・61条）。

〔2〕 會子　南宋に発行された紙幣。偽物の横行などその弊害が問題となった。「或論會子之弊。曰、這物事輕了、是誘人入於死地。若是一片白紙、也直一錢在。而今要革其弊、須是從頭理會方得」（卷一一一・32条）、「若如酒稅偽會子、及飢荒竊盜之類、猶可以情原其輕重大小而處之」（卷一一〇・32条）。

〔3〕 伊川曰、但覺意味深長　『遺書』卷十九・79条「先生云、某自十七八讀論語、當時已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長」。

〔4〕 當來　もともと、本来、当初。「當來天地生我底意、我而今須要自體認得」（卷六・87条）、「易當來只是爲占筮而作」（卷六十六・19条）。

【一一五・4】

看人傑論語疑義、云「正淳之病、多要與衆說相反。譬如一柄扇子、衆人說這一面、正淳便說那一面以詰之、及衆人說那一面、正淳却說這一面以詰之。舊見欽夫解論語、多有如此處。某嘗語之云、如此則別爲一書、與論語相詰難也（1）」。

〔注〕

(1) 舊見欽夫解論語と與論語相詰難也 欽夫(敬夫)は朱熹の親友張栻(号・南軒)の字。張栻には『癸巳論語解』という

『論語』の注釈書があり、これに対し朱熹は逐条的な批判の書簡を送っている。『朱子文集』卷三十一「與張敬夫論癸巳論語說」。

拙稿『朱子文集』訳註(六)と(八)、『論叢・アジアの文化と思想』第8と10号)はこの書簡の訳注。現在見ることができ  
る『癸巳論語解』は、そういった朱熹の批判を受け入れて改訂されたもの。この書簡の中でも朱熹はしばしば張栻の解釈態度  
を本条と同じように批判している。一例を引く。「今爲此說、是又欲求高於聖人、而不知其言之過、心之病也。温公謂楊子作  
玄、本以明易、非敢別作一書以與易競。今讀此書、雖名爲說論語者、然考其實則幾欲與論語競矣」(述而「奢而不孫」)。

【二五・五】

先生問人傑「學者多入於禪、何也。」人傑答以彼蓋厭吾儒窮格工夫(1)、所以要趨捷徑。先生曰「操則存、舍則亡(2)、吾儒自  
有此等工夫、然未有不操而存者。今釋子謂我有箇道理、能不操而存、故學者靡然從之。蓋爲主一工夫(3)學者徒能言而不能行、所  
以不能當抵他釋氏之說也。」人傑(校1)因曰「人傑之所見、却不徒言、乃真得所謂操而存者。」曰「畢竟有欠闕。」人傑曰「工夫欠  
闕則有之、然此心則未嘗不存也。」曰(校2)「正淳只管來爭、便是源頭有欠闕。」反覆教誨數十言。人傑曰「荷先生教誨、然說人傑  
不著(校3)。」曰(校4)「正淳自主張、以爲道理只如此。然以某觀之、有得者(校5)自然精明不昧。正淳更且靜坐思之、能知所  
以欠闕、則斯有進矣。」因言「程門諸公、如游揚者、見道不甚分明、所以說著(校6)做工夫處、都不緊切。須是操存之際、常看得  
在這裏、則愈益精明矣。」次日見先生、曰「昨日聞教誨、方知實有欠闕。」先生曰「聖人之心、如一泓止水、遇應事時(校7)、但見  
箇影子、所以發必中節(4)。若自心黑籠籠地、則應事安能中節。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「人傑」の二字無し。

(校2) 楠本本は「先生曰」に作る。

(校3) 正中書局本・和刻本・楠本本は「著」を「着」に作る。

(校4) 楠本本は「先生曰」に作る。

(校5) 楠本本は「有德者」に作る。

(校6) 正中書局本・和刻本・楠本本は「著」を「着」に作る。

(校7) 楠本本は「遇事時」に作る。

〔注〕

(1) 窮格工夫 『大学』八条目の一つ「格物」を朱熹は「窮理」と解釈し、事事物物の理を一つずつ「窮める」ことを学ぶ者の学問修養(工夫)の第一歩とする。朱子学の工夫方法は、この「格物窮理」と下文に見える「存心」「主一」のための「敬」の二つが、車の両輪の如く不可欠なものとされる。

(2) 操則存、舍則亡 『孟子』告子上「孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其郷、惟心之謂與」。

(3) 主一工夫 朱熹は程子を継承し、「主一(敬)」を学問修養(工夫)の根本とし、注(1)の「窮格工夫(格物窮理)」との並行を説く。『遺書』卷十五・17条「所謂敬者、主一之謂敬。所謂一者、無適之謂一」、同・45条「敬只是主一也。主一則既不之東、又不之西、如是則只是中。既不之此、又不之彼、如是則只是内。存此、則自然天理明」。

(4) 發必中節 『中庸』(章句第一章)「喜怒哀樂之未發謂之中、發而皆中節謂之和」。

### 【一一五・6】

靜時見此理、動時亦當見見此理(1)。若靜時能見、動時却見不得、恰似不會。

〔注〕

(1) 靜時見此理、動時亦當見見此理 ここにいう「靜時」とは具体的な事柄に対応していない時の相対的に静かな状況を指し、「動時」とは何か具体的な事柄に対応して心が動いている状況を意味する。靜時と動時を一貫する修養方法を確立することが、朱熹の若年時代からの最大の課題であった。朱熹は、最初の師李侗の「未発の存養(心が動く以前の静かな時を養う)」、親友張栻を通じて知った湖南学の「已発の端倪察識(心が動く端緒においてその可否を察識する)」を、ともに前者は静に後者は動に偏るものとして斥け、靜動を一貫する方法として「敬」にたどり着く。友枝龍太郎『朱子の思想形成』(春秋社、一九六九)参照。

### 【一一五・7】

問「索理未到精微(1)處(校1)、如何。」曰「(校2)平日思慮夾雜、不能虛明。用此昏底心、欲以觀天下之理、而斷天下之疑(2)、豈能究其精微乎。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「索理有未到精微處」に作る。

(校2) 楠本本は「此是平日思慮夾雜…」に作る。

〔注〕

(1) 精微 『中庸』(章句二十七章)「故君子尊德性而道問學、致廣大而盡精微、極高明而道中庸…」。

(2) 斷天下之疑 『易』繫辭上「是故聖人以通天下之志、以定天下之業、以斷天下之疑…」。

【二五・八】

人傑將行、請教。先生曰「平日工夫、須是做到極時(校1)、四邊皆黑、無路可入、方是有長進處。大疑則可大進。若自覺有些長進、便道我已到了、是未足以爲大進也。顏子仰高鑽堅、瞻前忽後、及至雖欲從之、末由也已(1)、直是無去處了。至此、可以語進矣。」

〔校注〕

(校1) 楠本本は「時」の字無し。

〔注〕

(1) 顏子仰高鑽堅、末由也已 『論語』子罕「顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後、夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾、雖欲從之、末由也已」。

【二五・九】

問「每有喜好適意底事、便覺有自私之心。若欲見理、莫當便與克下、使其心無所喜好、雖適意亦視爲當然否。」曰「此等事、見得道理分明、自然消磨了。似此迫切、却生病痛。」

〔校注〕

※本条は、楠本本卷一百十三には無し。

【二一五・10】

「學問亦無箇一超直入（1）之理、直是銖積寸累（2）做將去。某是如此喫辛苦、從漸做來。若要得知、亦須是喫辛苦了做、不是可以坐談僥倖而得。」正淳「連日（校1）侍先生、教自做工夫、至要約貫通處、似已詳盡。」先生曰「只欠做。」營

〔校注〕

〔校1〕 正中書局本は「通日」に作る。

〔注〕

（1） 一超直入 禪語で、修行の階梯を飛び越えて、ずばりと悟りの境地に飛び込むこと。『景德伝灯録』三十証道歌「勢力盡、箭還墜、招得來生不如意。爭似無爲實相門、一超直入如來地」。朱熹は、禪の「頓悟」と見紛うような説を批判し、次のようにもこの語を用いている。「此殆釋氏一聞千悟一超直入之虚談、非聖門明善誠身之實務也」（『雜学弁』呂氏大学解、『朱子文集』卷七十二）。

（2） 銖積寸累 少しずつ積み重ねること。「銖」は重さの単位。蘇軾『裙靴銘』「寒女之絲、銖積寸累」。『語類』にはもう一箇所次の用例が見える。「如窮格工夫、亦須銖積寸累、工夫到後、自然貫通」（卷九・10条）。

※本稿は、以下に掲げる既発表の訳稿に続くものである。

『明治大学教養論集』通卷三一八・三二七・三三九・三五八・三七六・三九〇号

※本稿は、平成十七（二一）年度文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」による「中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通——新儒教と医学思想の文献を中心として」（課題番号一七〇八三〇三四）の研究成果の一部である。

（かきうち・けいこ 文学部助教授）